

それでは、マタイの福音書 21 章 17～20 節。今朝のテキストを初めに通してお読みいたします。『¹⁷ イエスは彼らをあとに残し、都を出てベタニヤに行き、そこに泊まりました。(都というのはエルサレムのことです。)¹⁸ 翌朝、イエスは都に帰る途中、空腹を覚えられた。¹⁹ 道ばたにいちじくの木が見えたので、近づいて行かれたが、葉のほかは何もないのに気づかれた。それで、イエスはその木に「おまえの実は、もういつまでも、ならないように。」と言われた。すると、たちまちいちじくの木は枯れた。²⁰ 弟子たちは、これを見て、驚いて言った。「どうして、こうすぐにいちじくの木が枯れたのでしょうか。』驚くべき奇跡であると同時に、悩ましき物語でもあります。一体これは何なのか、何が起こったのか、イエスは一体何をされようとしているのか。ここから私たちに教えられる、引き出されるべきメッセージ、レッスンとは一体何であるのか。ただ単にイエスはお腹が空いていたので、苛^{いらだ}立っていちじくの木に八つ当たりしたわけではありません。それは私たちです。お腹が空くと結構苛立ちますけれども、そうではありません。結論から言いますと、ここでの物語は勿論象徴的な意味が含まれておりまして、それは偽善者に対するメッセージであります。偽善者、英語で言えば”hypocrite”。偽善者に対するメッセージです。「であるならば私には関係ありません。」という人がこの中に居るかもしれませんが、その人こそ偽善者であります。多分私を含めて皆さんは、この偽善の罪を日常的に犯していると思いますから、とても他人事とは思えないはずであります。「これはあの人のためのメッセージだ。」と思っている人がいるならば、その人こそ、あなたこそ偽善者であります。心してこのメッセージを皆さんと共に分かち合ってください。

カールという少年はドイツに暮らしておりました。カールの家庭は敬虔なユダヤ教徒の家庭でした。毎週安息日になりますと、安息日というのは金曜の日没から土曜の日没までであります。ユダヤ教の慣習に従って、律法と呼ばれるトーラーに従って、仕事を一切せずにユダヤ人の会堂、教会のようなところに集まって、そしてこのように私たちと同じように聖書の言葉を聞き、学び、そして信者同士で楽しい交わりの時を持ちます。カール少年も心から聖書の神を、イスラエルの神を愛し、そしてそのような宗教生活、ユダヤ人の慣習をエンジョイしておりました。ところがある時お父さんが仕事のことで引っ越すことを決めて、そして引っ越し先でもカール少年は安息日になったらユダヤ人の会堂にまた集まるんだと思っておりました。ところがお父さんは言いました。「今日から安息日には、ユダヤ教の会堂、シナゴグというところにはもう行かない。今日から、または今週からは、日曜日になったらルーテル教会に行くんだ。」カール少年はびっくりしました。一体どうしたのか。ユダヤ教から所謂プロテスタントに改宗したということです。その理由は、引っ越した先の新しい町では皆仕事先の連中がルーテルである。ルーテルというのはプロテスタントの最大教派です。ですからお父さんも仕事上、便宜上ルーテルに改宗しておけば仕事もスムーズに人脈も出来て、そして儲けもそこから生まれる。そこでお父さんはすぐにユダヤ教を捨ててプロテスタントに、ルーテルに改宗したわけです。あまりの変化にカール少年はとてついてもついていけませんでした。非常なるショックを受けました。でもお父さんがそう決めたので、仕方なく渋々幼い頃は一緒に教会へと、ルーテル教会へと通っていたわけです。でも、大きくなったら「もうそのような矛盾した生活はしたくない。神様よりも本当は仕事の方が大事なんだ。宗教はただビジネス上役に立つか、役に立たないか。それだけのためのものであって何の意味もない。何の価値もない。」大人になってイギリスに渡ったカール青年は、図書館に籠^{こも}るようにして一生懸命勉強しました。そして彼が出した結論は「宗教はアヘンである。」もう分かると思います。その少年こそカール・マルクスと言います。共産主義をまさに生み出したその人です。「宗教はアヘンである。」無神論者、無宗教者に彼はなっていました。そのきっかけを作ったのは、お父さんです。お父さんの偽善でありました。少年にとって聖書の神、イスラエルの神は、本物だと純粋に思っていたわけです。でもお父さんの偽善行為によって、それはすべて絵に描いた餅のようなただの理想としか映らず、「結局のところは神なんかいない。宗教なんてまやかしかである。」悲しい話であります。今日のテーマも偽善でありま

す。

イエス・キリストは、この時ちょうど前日のことです。日曜日でした。それはシュロの日曜日として有名なイエスが雌ロバの子の背に乗ってエルサレムに王として入場される時であります。人々は木の枝を持ってきてイエスの前に敷いて、自分たちの上着もそこに敷いて、そして「ホサナ、ホサナ。(今救いたまえ、今救いたまえ。)」と大声で叫んで、そしてイスラエルの王としてイエスを迎えたわけです。でもイエスは知っていました。数日経ったら彼らは^{てのひら}掌を返すようにして、全く豹変して「ホサナ、ホサナ。」から「十字架につけろ、十字架につけろ。除け、除け。」と群衆が一瞬にして変わってしまうことを知っていました。彼らが求めていたユダヤ人の王とは、または聖書に約束されている約束のメシアというのは、ローマ帝国の圧制から自分たちを救い出す。自分たちにとっては最も都合の良い軍事的政治的メシアであったわけです。イエスは重税をなくすためにこの世に来られたのではありません。イエスは重い罪の枷を取り除くために来られた霊的なメシアでありました。現世利益をもたらすためのご都合主義の神様ではなくて、イエス・キリストは私たちを永遠の滅びから救い出し、そして永遠の命を与えて、決して朽ちることのない本物の自由がある、本物の喜びがある、希望がある神の国へと私たちを迎え入れるために来られた救い主であったわけです。でも彼らはそのようなものを望んでいませんでした。目先のことだけ、目の前の利益だけ、今が良ければそれで良いという刹那主義、欲しいものが手に入ればそれで良い、困難や苦痛が取り除かれればそれで良い。そのような自分たちにとって都合の良いメシアを求めていたので、イエスが十字架に掛けられるなんていう時になったら、もう夢破れたかのようにして、全く^{きようざ}興奮めしてしまったわけです。そのような群衆たちの心の中をイエスは知られていたのです。この**マタイの 21 章 17～20 節**の中にまさに彼らの内側の状態、心理の状態、それを明らかにして弟子たちに教えようとしたわけです。

この中から 3 つのことを皆さんにお分かちしたいと思います。このいちじくの木が一瞬にして枯れてしまったというのは驚くべき奇跡ではありますが、この中には象徴的な意味が含まれていて、私たちにも大切なレッスンが与えられています。勿論それは偽善者に対するレッスンで、それを 3 つの側面から今朝はお分かちしたいと思います。

その第一番目の側面とは、実践的な側面です。もう一度**19 節**のところを見て欲しいと思います。『**道ばたにいちじくの木が見えた**』とあります。日本語では分かりづらいのですけれども、原文では、または英語の聖書でもハッキリ分かりますが、ここでは『**1 本のいちじくの木が見えた**』となっております。道端には 1 本だけいちじくが立っていたわけです。単独で孤立していたわけです。そのいちじくには多くの葉っぱが茂っておりました。実際にいちじくという樹木は皆さんも身近にあるので容易にイメージ出来ると思うのですけれども、不思議な果樹でありまして、先に実をつけるんです。その後に葉っぱをどんどん増やしていくようなそういう果樹であります。ですから葉っぱがあるということは、間違いなくそこに実があるということを容易に想像するわけです。葉っぱがあれば間違いなくそこには実がなっているんだと、確実視することが出来るわけです。ですからイエスも葉っぱを見て「あっ、このいちじくには実がなっているんだ。」とそう思われたわけです。でも近づいてみると、そこには実が 1 つもなかった。空腹でしたのでショックだったわけですけれども、でも私たちと違って、だから苛立っていちじくの木に八つ当たりして枯らしてしまったという話ではありません。そうではなくて勿論実がなければ、まだ他にも利用価値はあります。いちじくの木はそれこそ切り倒して^{たぎ}薪にでもすれば体を温めることも出来たでしょう。でも、敢えてイエスは全く利用価値がなくなってしまうほどに根から完全に枯らしてしまいました。根から枯れたというところは、並行記事の**マルコの福音書 11 章**のところに書いてあります。後で開きますからそこで確認出来ます。もう完全に枯らしてしまっただけです。何の利用価値もないまでに。「薪にすれば良かったじゃないですか。」と思うかもしれませんが、そうではなくてここでは敢えて私たちの体を温めるような薪にするのではなくて、むしろ私たちの心を温めるような物語にイエスはしたかったわけです。だから敢えて私たちにほとんど理解出来ないようなことをなさいました。根枯らしにされたわけです。**マルコの福音書 11 章**の並行記事の**13 節**というところには、もう遠目から葉が生い茂っているのが見えた、イエスはそこで見ているわけです。遠目から見て随分立派な木である。たくさん葉があるので、必然的にたくさん実がなっているだろうと推測出来る、その

ようないちじくの木でありました。時期はちょうどこれは過ぎ越しの祭りというお祭りが背景にありますので、4月です。春なんです。春に実をならせるというのは尋常ではありません。通常は5月6月にいちじくは、この地方では実をならせるんです。ですから早すぎるわけですけれども、でもこのいちじくの木はどのいちじくの木よりも真っ先に実をならせているような、少なくともそのように見せかけている木と映ったわけです。そこがポイントであります。誰よりも真っ先に葉をいっぱい茂らせて、如何にも実がいっぱいあるかのように見せかけている木のことであります。ぱっと見は素晴らしい、立派である。あたかも実が多くなっているかのように映っている。それが偽善であります。それが見掛け倒し。見た目だけということです。このテキストの**マタイ 21:19**の方の原語には『**1本の木**』だというふうに先ほど紹介しましたが、通常はいちじくの木というものは所謂他家受粉^{たかじゅふん}というのが必要になります。少なくとももう1本の木があって受粉していくということです。ただ最近のものはみな栽培種ですから1本だけでも実をならせるものがありますけれども、でも自然のものは1本だけでは通常実がならないわけです。いちじくの木に限らずですけれども、通常は複数の木があって受粉ができ、そして実がなるわけです。でもここには1本しかありません。そこから実践的なレッスンを皆さんに学んで頂きたいと思えます。1本だけでは実がならないということです。1本だけでは偽善者に成り下がるということです。いちじくとは私のこと、あなたのこと、人間のことであります。私たちは1人では実をならせることは出来ません。クリスチャンは1人では、単独では、孤立しては、実をならせることは出来ません。ヘブル 10:25 にこう書いてあります。『ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。』ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしてはいけません。「もう私は教会には行きません。1人でも、家でも聖書を読めます。本を読めば、聖書は1人でも勉強できます。メッセージのCDを聞けば、インターネットで私は礼拝できます。家でも1人で賛美出来るんです。1人でもお祈りできます。だから教会には行きません。行く必要を感じません。」1人では実をならせることは出来ないことを今朝覚えて欲しいと思えます。いちじくの木にも別の木が必要であります。他家受粉が必要なんです。自家受粉は出来ません。ついでにヘブル 2:12 も併せて読みたいと思えます。語っているのはイエス・キリストです。『「わたしは(イエスは)御名を(父なる神の名前を)、わたしの兄弟たち(イエスの兄弟たちとは、イエスを信じる私たちのことです。クリスチャンたちのことです。)に告げよう。教会の中で、わたしは(イエスは)あなたを(父なる神を)賛美しよう。』これは詩篇 22:22 からヘブル書の記者が引用したものです。語っているのはイエスというふうになっております。詩篇 22 篇には、私たちの神はイスラエルの賛美の中に住まわれる方です。会衆の中に、会衆賛美の中にご臨在下さるお方だと言われています。そこでイエスは、会衆の中で、教会の中で私たちと一緒に賛美して下さるとあります。あなたが教会にも行かずに、たった1人で、単独で孤立して、クリスチャンのつもりでいるならば、このような素晴らしい体験を味わうことは出来ません。すなわち教会の中でイエスと一緒に賛美をするという体験です。素晴らしい体験です。1人ではこのことは体験出来ません。私たちの神は父であるということも忘れてはいけません。お父さんは家族が1番大事なんです。子供たちのことを愛しております。一人一人をこよなく愛しています。でも、バラバラには見ておりません。常に子供たちは1つところに集まって、1つの食卓を囲んで、皆でご飯を食べる。勝手に子供たちがそれぞれの部屋でテレビでも見ながらバラバラに食事をするなどすれば、お父さんの心は痛むでしょう。お父さんはいつでも、子供たちは1つのテーブルに集まって、皆で揃って団欒を楽しむのであると。それが本物の家族であります。教会でこの食卓は聖餐式のテーブルというふうにも見ることができます。主の晩餐とも言います。パンと杯を頂く時、私たちはそこにキリストの愛を見出して、キリストを覚えて、そしてますます私たちは心を1つにして声を揃えて神様をほめたたえることが出来ます。

また御言葉のマナがあります。マナというのは天からのパンとも言われる不思議な食べ物で、私たちの霊を養うものです。それはこの教会で言うところのバイブルスタディーです。勿論このような礼拝の説教も含めてですけれども、御言葉の糧を頂くことが出来る、マナを頂くことが出来る。これも食卓であります。それを神様は、家族揃って子どもたちが一堂に会して一緒に食べることを望んでおられます。「否、私は1人で家で聖書を読んでいます。」とか、「どこそこのセミナーに行ってます。」からとか、「礼拝はインターネットで、バーチャルでやっています。」バーチャルの

礼拝は、所詮はバーチャルです。そのような信仰もバーチャルです。家族が揃わなければ、お父さんの心は満たされません。各自の部屋で勝手にご飯を食べても子供たちは生きていけます。ご飯を食べれば、とりあえず食い繋いでいけば生きてはいけます。でも、それで良いのでしょうか。それで家族なんのでしょうか。本当に満たされるのでしょうか。そうではないはずです。やっぱり家族はお父さんの下、皆で1つのテーブルを囲む。それが健全な家族、それが幸せな家族です。お腹がいっぱいでも心が空っぽでは、寂しい限りであります。そこには実などとも見出せません。

もしあなたが孤立した単独のいちじくの木となっているならば、心して聞いて欲しいと思います。一時的には、他人の目からは良く見えるかもしれませんが、遠目から見ても葉っぱがいっぱいあって生い茂っていて、きっと実がいっぱいなんだろうなと思わせるような、人を感じさせるような姿をあなたは見せることが出来るかもしれません。それこそ充実している、漢字で「実が充ちている」と書きます。「それこそ私は充実しています。別に教会は行きませんが、充実した生活を送っているんです。」それは偽善です。本当は充実していないと思います。聖書によれば、私たちは互いを必要とするものである。他家受粉が必要なんです。聖書の中に何度となく「互いに」という言葉が出ています。互いに愛し合いなさい。最も大切な戒めの1つです。でも1人では、これは実行出来ません。神の1番大切だとされている命令すら守れないんです、1人では。少なくとも2人以上必要です。互いに愛し合いなさい。互いに仕え合いなさい。互いに慰め合いなさい。1人では実践不可能であります。私たちは、教会として“キリストの体”とも呼ばれています。体は1つでなければ異常です。体の器官がバラバラだったら、それはバラバラ死体です。

第一ペテロ 2:4~5 も参照したいと思います。『**主のもとに来なさい。主は、人には捨てられたが、神の目には、選ばれた、尊い、生ける石です。**(主というのはイエス・キリストのことです。5節に私たちのことが書いてあります。)⁵あなたがたも生ける石として、**霊の家に築き上げられなさい。そして、聖なる祭司として、イエス・キリストを通して、神に喜ばれる霊のいけにえをささげなさい。**』私たちはイエスと同じように似た者として“生ける石”と呼ばれています。建物、神殿は石で組み立てられていました。石のブロックのような形でそれぞれがぴったりオーダーメイドで石切場で切られたものとして互いに組み合わせられて1つの建物を建てていくわけですけれども、私たちはバラバラの石の塊ではありません。ブロックではないんです。私たちは1つの家を築き上げるためにお互いを必要としております。そしてあなたが孤立している、単独で生活しているいちじくの木であるならば、最終的には根から枯れてしまうということも覚えて欲しいと思います。そのままでは大変なことになるということも、この物語から警告として受け止めることが出来ると思います。周りからはあなたは充実して幸せで立派に見えるかもしれませんが。たくさんの葉が茂っている。きっと多くの実があるに違いない。でも主が来られる時、主のためには1つの実もないということも覚えて欲しいと思います。主があなたのところに来られる時、あなたには1つの実もなければあなたはどうなってしまうのでしょうか。根から枯れてしまうということです。これがまず第一番目の実践的な側面から見たレッスンであります。

第二番目は預言的な側面から見たレッスンです。いちじくの木は、聖書では象徴的な意味が与えられておりまして、ここではイスラエルを指しております。イスラエル民族のことです。イスラエル国家を指しています。イザヤにしても、エレミヤにしても、エゼキエルにしても、ホセアにしても、アモスにしても、これはみんな旧約聖書の預言者たちで、彼らの名前を冠した預言書が旧約聖書の中にあります。その中でイスラエルのことが、いちじくの木というふうにととえられております。いちじくの木は、イスラエルの標章であると。象徴という意味です。何度となくイスラエルはいちじくの木と見なされているわけです。例えば日本の国樹というものは正式にはないそうですけれども、日本は桜が代表であります。日本と言えば桜と。韓国に行けば韓国の国樹は松です。北朝鮮はモクレンだそうですけれども、アメリカはオークの木です。日本で言えばならの木になりますけれども、それが国樹、国の木だと言われています。イスラエルの国の木というのは、正式に現在ではオリーブの木とされておりますが、聖書ではオリーブの木もやはりイスラエルを指している。そして他にもぶどうの木もイスラエルを指している。そしていちじくの木もイスラエルを指しているというふうに使われております。この象徴、これは聖書の中で預言的に使われております。

先程イスラエルはぶどうにも、またオリーブの木にもたとえられていると言いましたが、これは参考までにそれぞれ

の違いが一体どこにあるのかということも触れておきたいと思いますが、まずイスラエルの過去を表すのがぶどうの木であります。聖書の中でイスラエルがぶどうの木にたとえられているところは、イスラエルの過去の面。それはイエス・キリストが来られるまでのイスラエルであります。旧約聖書時代からイエスが来られる新約の時代までのイスラエル、過去のイスラエルです。そしてぶどうは、イスラエルの霊的特権を表す標章であります。もう一つイスラエルはいちじくにもたとえられています、いちじくはイスラエルの現在を表しています。イエス・キリストがこの世に来られた後、十字架の死を経て 3 日目によみがえって、そして現在に至るまでのイスラエルです。それはイスラエルの国家的特権を象徴する木であります。そしてオリーブの木は、イスラエルの未来です。将来を表しています。具体的には、厳密には、千年王国 (millennium kingdom) という、イエスが世の終りになると再臨されます。再びこの地上に戻って来られます。その後樹立される国、1000 年間イエスが統治される国ですが、そこでのイスラエルの姿がオリーブの木にたとえられています。それはイスラエルの宗教的特権を表しています。もっと詳しく学びたい方は、**ローマ11章**でこの辺は教えておりますので、また CD なりインターネットで探して学んでみて下さい。いずれにしてもここではいちじくの木がイスラエルを表しているということを覚えて欲しいと思います。

イスラエルは、この道端に 1 本だけ生えているいちじくの木のようにたくさんの葉を茂らせておりました。その葉というのは、イスラエルの宗教熱心さを表していました。神殿で礼拝も捧げておりました。彼らには律法と呼ばれるトーラーがありました。神聖な書物です。そして彼らには、パリサイ人、律法学者、サドカイ人、祭司といった様々な宗教的な特権階級の者たちがおりました。葉っぱがいっぱい茂っていたんです。でもイエスは、その当時のイスラエルに 1 つの実も見つけることは出来ませんでした。熱心だけれども、見た目は立派だけれども、中身がない。実がないということです。

ヨハネの福音書 5:39~40 にイエスの言葉がありますので、そちらも参照したいと思います。語り手はイエスであります。誰に対して語っているかというイスラエルの宗教的な特権階級の者たち。パリサイ人とか律法学者と呼ばれる宗教家たちに対して語られた言葉です。彼らは、葉ばかり茂らせている実の無いいちじくだと見なされております。『³⁹ **あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。(熱心に聖書を勉強しているんです、研究しているんです。)その聖書が、わたしについて証言しているのです。(聖書はイエス・キリストについて証言している証言集です。聖書のテーマは、イエス・キリストです。ここで言われている聖書というのは、まだ新約聖書は完成しておりませんので、当然旧約聖書ことを指しております。旧約聖書のテーマは、イエス・キリストです。旧約聖書を読んでいて、そこにイエス・キリストを見出していないならば、あなたの読み方は間違っています。そのような読み方では絶対に実が出来ません。パリサイ人だとか律法学者だとか偽善者と同じ程度の勉強の仕方しか出来ません。実がないんです。一生懸命ですけども、聖書は勉強しています。教会には足繁く通います。教会の活動にも熱心に携わります。犠牲的に奉仕をします。たくさん献金します。でも実がない。イスラエルと私たちを重ねて見ることが出来ると思います。)**⁴⁰ **それなのに、あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません。』**

この時から 40 年経ってからローマ帝国の将軍ティートスがエルサレムに侵攻してきて、エルサレムは陥落します。エルサレムの中心であった神殿も焼き討ちにされて木っ端微塵になってしまいます。そしてイスラエルの民は祖国を追われて、世界中に離散していきます。1948 年になるまでイスラエルの民は、所謂ユダヤ人たちは世界のそこかしこに散り散りバラバラに暮らしておりました。祖国を失ったまま約 2000 年間イスラエルの民は流浪していたわけです。でも驚くべきことに 1948 年 5 月 14 日に彼らは祖国において独立宣言をいたしました。2000 年振りにイスラエルの民は祖国を取り戻したんです。今イスラエルのことがニュースでも散々話題になっていますけれども、是非聖書的な視点からもニュースを知って頂きたいと思います。いずれにしてもここでは、イスラエルは実がないということで、40 年後に完全に枯らされたということを歴史の事実としても見て欲しいと思います。それは AD70 年に起こったことです。イエスはこのことをあらかじめ預言されておりました。この後読み進んでいくと、**マタイの福音書 24 章**というところでイエスはこの AD70 年の出来事を、ローマの将軍ティートスがエルサレムに侵攻してきて、エルサレムも神殿も何もかも破壊して大虐殺をするということをあらかじめ預言していたんです。40 年も前に。それが果たして AD70 年

に実現したと、成就したということであります。それまでは多くの葉が茂っていた、健康な健全な見た目が立派な木だったんです。でも、実がないということで完全に根から枯らされたような形になりました。でも驚くべきことに約 2000 年後にもう一度復活したんです。そのこともイエスは語られています。イスラエルが復活したならば、祖国にまた集められて国が再興されるならば、それが世の終わりの前兆である。最近も世の終わりの話もニュースでちょっと話題になりました。イエス・キリストが戻って来られる、携挙があるだとか。アメリカなどではもう大手のメディアでもこのことは取り上げられました。普段は全然携挙の話なんか一切ニュースにしないのに、いきなりこの最近のちょうど先週の土曜日だったと思います。あるアメリカ人の伝道者が、イエス・キリストが戻って来られて携挙があって世はもう終わるんだというようなことを言っていたんですけども、ラジオの伝道者ですが。それを一般のマスコミが取り上げて散々キリスト教をコケにしたわけですけども、面白いことですね。聖書にはイエス・キリストがいつ戻って来られか、何年何月何日に戻って来られるかなんてことは一切書いてありません。でも、世の終わりの前兆はあるということをイエスはあらかじめ私たちには伝えております。それはイスラエルが再び 2000 年経ってから 1 つところに、祖国に集められて、そして国を再興する時。これは先程ご紹介した**マタイの 24 章**に預言されております。ですから今はもう世の終わりの時代に入っている、突入しているということであります。イエス・キリストがいつ戻って来られても不思議ではない、そういう時代に入っているということであります。その話をするの大変時間がかかってしまうので、今日は 3 つポイントがあるので、2 番目で途中でありますので、もし預言のことに興味がある方がいらっしゃれば、もう既に詳しく教えているメッセージのテープもありますので、是非そちらもご利用頂きたいと思っております。

3 番目のポイントの方に移りたいと思っております。こちらが今朝のハイライト、私が最も強調したいポイントであります。それは個人的なレッスンであります。最初のポイントは実践的レッスン。2 番目のポイントは預言的レッスン。3 番目のポイントは個人的レッスンです。これが今朝最も強調したい、ストレスしたいポイントであります。イエスは空腹でした、お腹が空きました。そしていちじくの実を探したんですけども実は得られませんでした。この物語を読む時に私は、最初の人アダムのことを思い起こします。最初のアダム、思い起こして下さい。**創世記**にまで遡ります。最初のアダムはエデンの園においていちじくの木を探しました。彼が探したのはいちじくの実ではありません。彼が探したのはいちじくの葉っぱでありました。ご存じのようにアダムは食べてはならないとする禁断の木の実、あの善悪の知識の木の実を食べてしまい、そして結果的には自分が裸であることに気がきました。その裸を覆い隠すためにいちじくの葉っぱを利用して身を隠したわけです。隠蔽したわけです。自分の恥ずかしさを、自分の罪悪感、罪責感をカバーするためにいちじくの葉っぱを利用したわけです。それが人間の傾向です。私たちの傾向です。すなわち隠蔽体質というものです。隠蔽体質は東京電力のスペシャリティーではありません。隠蔽体質は私たちのスペシャリティーです。お得意です。彼らを指差して責める気はありません。私たちも同じです。私たちも自分の失態、醜いところ、汚いところ、罪深いところを隠したいものです。どうやって隠すのでしょうか。いちじくの葉っぱで隠すんです。如何にも見た目が立派なように、如何にもそこに実がたわわになっているかのように見せかけるのです。具体的な話をすれば、一般的にも私たちは自分自身の内面、人には見せられない部分、恥ずかしい部分、汚い部分、弱い部分、それを隠すために、あたかも自分が立派なように見せるために、例えばロータリークラブに入ります。ライオンズクラブとか、JC(青年会議所)とか、ビジネスをしていれば誰でも憧れたり、そこに入れば一角の人物、ある程度社会的にも地位のある人、認められる人、立派な人物、そのように見えるわけです。ある人は肩書きを好みます。一生懸命昇進を狙っている人たちは、一生懸命高学歴を目指し、たくさんの資格をとって、そして有名な企業に入って、その中でもそれなりの地位を目指す。その理由は何でしょうか。勿論お金が欲しい、良い生活がしたい、それもあるかもしれませんが。でもそれ以上にもっと内面の部分では、自分をもっとよく見せたい、立派に見せたい、一角の人物だと。なぜそこまで躍起になるかといえば、私の中には醜い部分がある。恥ずかしい、人には見せたくない部分がある。それを覆い隠すためにはたくさんの葉っぱが必要である。立派に見せないとバレてしまうから。それが怖いから。これはクリスチャンではないノンクリスチャンの人たちに対してだけ言っているわけではありません。クリスチャンの中にもそういう人たちがおります。例えば VIP に入るとか。(あまり良い例ではないかもしれませんが。)またギデオンに入るとか。

(これも良くないですね。)それなりに地位のある、社会的地位のある人たちがそういうところに入りたがるわけです。勿論それらの働きを私は何もかも偽善だと言っているわけではありません。誤解しないで下さい。そうではなくて、中にはクリスチャンで自分が立派である、敬虔な熱心なクリスチャンであることをアピールするために、証明するためにわざわざVIPに入会するとか、わざわざギデオンに入会するとか、YMCAだとか、ワイズメンズクラブだとか、そんなものに入ろうとする。そういう人たちが実際にいると言っているんです。これは事実です。クリスチャンの中にもある傾向です。もっと身近なことを言うならば、教会の中で役員になるとか、何か重要な奉仕を担うだとか、教会学校の先生になるとか、熱心に奉仕をする、たくさんの献金を捧げる、教会で貢献をする。そうすると他人からはどう映るでしょうか。「あの人は立派なクリスチャンです。敬虔な熱心なクリスチャンです。」と見てもらえるわけです。それが私たちのいちじくの葉っぱであります。私たちの恥ずかしい罪深い本当の姿を隠すためのカモフラージュです。クリスチャンも隠蔽工作をしてしまう弱者であります。それが最初のアダムの罪の性質でありました。

でも最後のアダムと呼ばれるお方。これはパウロが**第一コリント 15 章**でイエス・キリストのことを“最後のアダム”と呼んでいるわけですがけれども、最後のアダムは葉っぱを探しませんでした。彼が探したのは実であります。要するにイエスにとっては、外見などどうでもよかったわけです。関係ないんです。あなたの肩書きなどどうでもいいんです。あなたの奉仕などどうでもいいんです。イエスが欲しいのは、あなたの中身です、心です。あなたがいくら献金したか、イエスには何の関心もありません。あなたがどれほど教会の集会に出席したのか、欠かさず日曜礼拝を休まずに来たのか、そんなことはイエスにとってはどうでもいいんです。それはみんな葉っぱです。勿論それらは素晴らしいことですが、形骸化してしまえばただの偽善行為であります。それよりもイエスが関心のあるのは、実であります。イエスは空腹でした、お腹が空いていたんです。イエスが欲するのは葉っぱではなくて、実であります。イエスが空腹が空いているのであれば、「他の人の実を食べて下さいよ。」とあなたは思うかもしれませんが。「私ではなくたって他の人がたくさん実をならせていますから、どうぞそちらに行って下さい。」とあなたは言うかもしれませんが。「あの役員のところに行って下さい。あのワーシップリーダーのところに行って下さい。あの牧師のところに行って下さい。たくさん実があるでしょうから。そこから食べてお腹を満たして下さい。」他人事のようにあなたは思うかもしれませんが、イエスはあなたのところに個人的に来られます。「お腹が空いた。あなたから実が欲しい。実が所望である。葉っぱではない。」とイエスは言われます。実と言われても抽象的で具体的には一体どういうことなのか、と思うかもしれませんが。いくつかの聖書の箇所を言いますので、メモして頂きたいと思います。**ガラテヤ 5:22~23**、『²²しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、²³ 柔和、自制です。』イエスが欲しいのはこれらであります。愛の実であります。御霊の実というのは単数形ですので、愛という 1 つの実の中にこれらが全てセットで含まれております。愛の実が欲しいんです。葉っぱではありません。

または**ヘブル 13:15**『ですから、私たちはキリストを通して、賛美のいけにえ、すなわち御名をたたえるくちびるの果実を(実です。)、神に絶えずささげようではありませんか。』これは賛美の実。感謝の実と言って良いと思います。イエスが欲しているのは、ほめたたえ、賛美、感謝の実であります。

また**コロサイ 1:6**では『この福音は、あなたがたが神の恵みを聞き、それをほんとうに理解したとき以来、あなたがたの間でも見られるとおりの勢いをもって、世界中で、実を結び広がり続けています。福音はそのようにしてあなたがたに届いたのです。』ここで言う“実”とは、福音の実です。イエスがあなたに欲しているのは、福音の実です。

もう 1 箇所だけ**ヤコブ 3:18**『義の実を結ばせる種は、平和をつくる人によって平和のうちに蒔かれます。』義の実とあります。イエス・キリストが欲するのは、義の実でもあります。毎日毎日、毎朝毎朝、イエスはあなたといういちじくの木のところに来られて、「お腹が空いたから、あなたから実が欲しい。」と言われます。あなたはイエスに差し上げる実を結んでいるでしょうか。用意しているでしょうか。それとも葉っぱばかりでしょうか。あなたは「私には実がないけれども、私はよくやっていると思う。この宣教団体にも、この慈善団体にも、この NGO にもたくさんお金をサポートしました。教会の集会はほとんど出席しております。実がないけれども、私には葉っぱがあるんです。見て下さい、この立派な葉っぱを。こんなに多くあります。こんなに生い茂っています。」あなたはイエスに一生懸命アピールするかも

しれません。そして人から見てもその姿は実に健康的で立派に見えます。たくさん葉っぱがある。さぞかし多くの実があるに違いない。立派に違いない。人格者に違いない。敬虔なクリスチャンに違いないと。人の目にも実に魅力的に見えると思います。人を感心させることが出来ると思います。褒められることもいっぱいあるでしょう。感謝されることもいっぱいあるでしょう。でもイエスの目にはどう映っているのでしょうか。「私はあなたの葉っぱには何の関心もない。私があなたに求めているのは実である。」と。本物の実です。リアルな実であります。イエスがあなたに欲しているのは、先程言ったような実であります。今朝あなたはイエス・キリストをたたえるために忙しい中でも、たとえ10分でもわざわざ時間をとって、イエスに賛美を捧げ、イエスがただ神であるというその1点で、イエスが神であるが故にわざわざ時間をとって、10分でも20分でも30分でも聖書を開き、祈り、礼拝を捧げる。個人のデボーションの時間で。忙しい最中でもそのようにあなたはイエスのために実を結ぼうとする。その実をイエスは喜んで受け取って、食し、味わって下さいます。

マルコの福音書11章の並行記事のところを皆さんに見て欲しいと思います。並行記事ですから同じことが記録されています。ただ若干部分的に違っている部分もありますから、それは今日は触れませんが、今日を留めて頂きたいのはマルコ11:13~14のところです。『¹³葉の茂ったいちじくの木が遠くに見えたので(遠くから見てもいっぱい葉っぱがあったので立派に見えたわけです。)、それに何かありはしないかと見に行かれたが(当然です。いちじくは葉っぱの前に実がなるわけですから、葉っぱがいっぱいあるということは確実に実がいっぱいあると予見出来るわけです。)、そこに来ると、葉のほかは何もないのに気づかれた。いちじくのなる季節ではなかったからである。(4月です。本来は5月6月に実がなるんですが、でもこのいちじくは驚くことに誰よりも真っ先に葉っぱを茂らせていました。)¹⁴ イエスは、その木に向かって言われた。「今後(ここを注目して下さい。)、いつまでも、だれもおまえの実を食べることのないように。」弟子たちはこれを聞いていた。』イエスの言葉に注目し、この言葉を心にしっかり留めて欲しいと思います。「今後、いつまでも、だれもおまえの実を食べることのないように。」非常にショッキングな言葉です。呪いの言葉であります。何が言いたいかと言いますと、もしあなたがイエス・キリストを満足させることが出来ないならば、あなたは他の人も満足させることは出来ません。それが、イエスがここで言わんとしていることです。「今後、いつまでも、だれもおまえの実を食べることのないように。」イエス・キリストを満足させることが出来る者は、イエスに実をもたらすことが出来る者は、間違いなく他の者にも実をもたらすことが出来るわけです。自明の理であります。イエスに喜びをもたらせない者は、人にも究極的には喜びをもたらすことは出来ません。満しをもたらすことは出来ません。一番問われているのは、まずはイエスに対して実を結ぶということです。これが優先順位です。これが最優先事項です。まずはイエスに対してあなたは実を結んでいるでしょうか。そうであるならば、あなたは他者に対しても多くの実を結び、他者にも豊かな祝福をもたらす木になることが出来ます。まずはイエスとあなたの関係。それが最優先事項です。イエスに対してあなたは葉っぱではなくて、実をならせる必要があります。教会には葉っぱがいっぱいあります。たくさんアクティビティーがあります。たくさんミニストリーと呼ばれるものがあります。たくさん奉仕があります。実がない、そういう教会がいっぱいあります。葉だらけの生い茂った教会。そのような教会はイエスのために存在しているのではありません。そうではなくて、自分の見栄のために存在しているんです。私たちはどんなに立派なのか。どんなことが出来るのか。こんなことも出来る、あんなことも出来る。私たちは出来る人たちだ。立派なクリスチャンだ。たくさん人が集まっている教会だ。非常にアクティブで賑やかな教会である。誰に対してアピールするのでしょうか。奉仕だとかミニストリーといったものを私は勿論否定するつもりはありませんし、大いに奨励したいと思いますが、でもそれは第一義的には、誰のために成すかということを考えて頂きたいということです。葉っぱばかり茂らせることに躍起になっていないでしょうか。このマラナサグレースフェロシッパは、葉っぱなんか1つも要りません、正直に言えば。実があれば充分です。そしてたくさんの実はいりません。イエスはトラックをつけて「たくさん実を収穫したいから、たくさんつけろ。」と言うような方ではありません。1つでも2つでもあれば、それで充分であります。極端な話に聞こえるかもしれませんが、私はむしろ葉っぱは1つも要らないと思っています。実が何よりも必要です。誰に対してか。イエスに対してであります。教会は、私たちのために存在しているのではありません。イエスのた

めに第一義的には存在しております。このことを多くの人たち、クリスチャンと呼ばれる人たちは理解していません。教会は自分たちのためにあると思ひ込んでいます。その証拠に礼拝のあとに「今日は恵まれました。今日は祝福されました。素晴らしい礼拝でした。」と。私のところに個人的に来て、そのようにほめ言葉を、感謝の言葉を言って頂ける人もおりますけれども、でもひょっとしたら勘違いしているかもしれません。礼拝はその人のためにあるのではありません。あなたのエンターテイメントのためにあるのではありません。あなたを満足させるために、あなたを祝福するためにあるのではありません。礼拝はイエス・キリストに実をもたらすために、イエスに祝福をもたらすために、イエスに満足をもたらすために存在するんです。それが教会の存在意義であります。教会は、何度も言いますが、あなたのためにあるのではありません。今日ここに来たあなたは満足したか、満足しなかったか、それはあなたの考えるべきこと、言うべきことではありません。そうではなくて、あなたの考えるべきことは、問うべきことは、今日この礼拝を通してイエスは満足されたか、イエスは本当に喜んで下さったか。それがあなたの関心事でなければいけません。あなたが主体ではないんです。今日は私の好きな賛美が歌われなかったとか、今日は話が長すぎたとか、そういうことではありません。今日のランチは大したことがなかった(MGFではそういうことは絶対にありませんけれども。)そういうことではなくて、イエスは私たちの礼拝を通してどれほど喜んで下さったか、どれほど楽しんで下さったか。それが、私たちが考えるべきことであります。それが最優先事項であります。実際にルカの福音書 24:53、ルカの福音書の一番最後の言葉、そこにこう書いてあります。『いつも宮にいて神をほめたたえていた。』と。エルサレム神殿で弟子たちは神様をほめたたえていたわけですが、その“ほめたたえていた”というところに新改訳聖書は*がついていて欄外を見て頂くと、そこに直訳があります。「祝福していた」とあります。礼拝は実は神を祝福することです。多くの人は勘違いしています。礼拝によって自分が祝福されるものだと思っています。勿論それは二次的に、副産物のようにして祝福が伴うということはありません。神様が祝福されれば、私たちが必然的に祝福されると、これも自明の理でありますけれども。でも第一義的には、私たちが祝福されるために礼拝に来るのではありません。「祝福が欲しいから今日は日曜日に礼拝に来ました。」まちがいです。教会はあなたのためにあるのではありません。教会はイエスのためにある、イエスに実を差し出すために、実を捧げるために、賛美の果実を、御霊の実を誰に対して結ぶのか。イエスを祝福するためであります。

ルカの福音書を開いているようであれば 13 章 6~7 節、そちらにも並行記事ではないですが、いちじくの木が出てきますから、そちらを見て欲しいと思います。『⁶ イエスはこのようなたとえを話された。「ある人が、ぶどう園にいちじくの木を植えておいた。(いちじく、出てきました。ぶどうもイスラエルのシンボルだと先程言いました。ぶどう園もいちじくもイスラエルを指しています。)実を取りに来たが、何も見つからなかった。⁷ そこで、ぶどう園の番人に言った。『見なさい。三年もの間、やって来ては、このいちじくの実のなるのを待っているのに、なっていたためしがない。これを切り倒してしまいなさい。何のために土地をふさいでいるのですか。』実がならないなんて、3 年も経っているのに。肥しの無駄遣い、栄養の無駄遣い、スペースを取るばかりだ、他の木の邪魔になる、葉ばかり生い茂って日光が塞がれてしまう。そんな役に立たないような木は切り倒してしまえと。当然のことです。8~9 節を見て下さい。番人はどう答えるでしょうか。『⁸ 番人は答えて言った。『ご主人。どうか、ことし一年そのままにしてやってください。木の回りを掘って、肥やしをやってみますから。⁹ もしそれで来年、実を結べばよし、それでもだめなら、切り倒してください。』』ぶどう園の番人は、とりなす者です。どうかご猶予下さい。1 年の猶予を下さい。とりなしています。いちじくの木の名乞いをしているようなものです。このぶどう園の番人、とりなす者とは、イエス・キリストのことです。イエス・キリストは私たちが弁護して下さる方だと、第一ヨハネ 2 章 1 節に書いてあります。弁護して下さる方とは、文字通り弁護士ということ。私たちに弁護士がいるんです。高いお金を払う必要ありません。『私の子どもたち。私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。もしだれかが罪を犯したなら、私たちに、御父の御前で弁護して下さる方があります。それは、義なるイエス・キリストです。』そこにはイエスが私たちの弁護をして下さる弁護士だと書いてあります。とりなしてもらえる者としてヘブル 7:25 にも書いてあります。イエス・キリストとはどういう方か分かります。ぶどう園の番人のような方です。『したがって、ご自分によって神に近づく人々

を、完全に救うことができになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。』キリストは彼らのため、私たちのために、いつもとりなしをして下さる神であります。あと1年猶予を下さい。実はこの午前礼拝は去年の4月からスタートしました。1年経ったんです。1年経ってどうでしょうか。あなたには多くの実が結ばれたでしょうか。たくさんの御言葉をあなたは取り込んでいます。3年もの間バイブルスタディーに足繁く通い、ほとんど毎週礼拝に集い、たくさんの御言葉を頂いております。でも、実を結んでいるでしょうか。ただスペースばかりを取る、他のクリスチャンたちにむしろ邪魔になってしまうような、弊害を与えてしまうような、そんな者に成り下がってはいませんか。要するに葉ばかりの偽善的なクリスチャンに成り下がっていませんか。でもそんな私たちに対してぶどう園の番人、私たちをとりなす者、弁護士であるイエス・キリストは、「どうか、もう1年猶予を下さい。」もう1年。でも1年経ったら、もしあなたが実をならさなければ、あなたは切り倒されます。切り倒されて当然です。実を結ばないわけですから。ただただ葉ばかり作るわけですから、何の役にも立ちません。むしろ他の木にも害を与えます。厳粛に受け止めて欲しいと思います。勿論これは文字通りの年数で皆さんに考えて頂いているわけではないです。1年というのは、文字通り1年しかないという意味ではありません。常にチャンスを与えて下さるお方です。セカンドチャンスです。もしかしたら、来年はないかもしれません。その前にあなたは不慮の事故でこの世を去るかもしれません。急に心臓発作や脳梗塞でとか。または急に大地震があって、大津波があってとか。またはイエス・キリストが文字通り迎えに来る携挙があって、1年ないかもしれません。あなたの実をならせるチャンスは刻一刻と少なくなっているということも覚えて欲しいと思います。この世は終わりだというふうにも言いました。イスラエルが復興してからは、もう世の終りで、いつこの世が終わってもおかしくない。こういう時代に入っております。その時に是非このいちじくの木がどのようになってしまったのか、思い起こして頂きたいと思います。マタイの21章の並行記事のマルコの福音書11章の記事では、いちじくの木は根から枯れた、と書いてあります。まずどこから枯れ始めるかと言うと、根から枯れ始めるんです。根っこというのは目に見えません。地面の下です。すなわちあなたが1人でいる時の時間。教会で兄弟姉妹と一緒にいる時間ではありません。1人でいる時間、その時あなたはどのように過ごしているでしょうか。日曜日以外の平日の日、あなたはどのようにしているでしょうか。家に居ない時のあなたは、職場のあなたはどのようにでしょうか。根から枯れ始めるんです。人には見えない部分です。根深い罪があるならば。ぶどう園の番人は実をならせるために地面を掘って、そして肥やしを与えてくれます。地面を掘るとするのはまさにイエス・キリストがあなたの根を暴こうとする、罪を暴露する、そういう働きでもあります。でもそれは恥ずかしいことであり、避けたいことであり、できれば私たちはそのような目には遭いたくないんですけれども、でもあなたが実をならさなければ、結ばなければ、切り倒されてしまうことをイエスは知っておりますので、何としてでもぶどう園の番人はあなたに実を結んで欲しい。だからあなたの嫌なところを、隠したいところを、心の奥底にある秘めごとを、あからさまにしようとして掘るんです。掘って掘って掘りまくるんです。根に栄養を与えるために。教会に来て痛いことを言われた。触れて欲しくないところを触れられた。隠したかったのに、そこを暴露された。だからもう来たくありません、何て言う人もいるわけなんですけれども。でもそれはイエスキリストの憐れみです。恵みです。もし今日このメッセージを通してあなたの心はまるでえぐられたようだ、自分でも伏せておきたかったことを、隠したかったことを、根深いこの部分を、暴露された。そう感じている人がいるならば、主に感謝して下さい。あなたにはまだチャンスが与えられているということです。そして肥やしを与えてくれます。栄養をもっともっと直接根から吸収出来るように、実をもっとならせるように、イエス・キリストが働きかけをして下さいます。それを拒まないで下さい。

最後にピリピ3:4~7を読んで終りたいと思います。これはパウロという人が語っている言葉です。『⁴ただし、私は、人間的なものにおいても頼むところがあります。もし、ほかの人が人間的なものに頼むところがあると思うなら、私は、それ以上です。⁵ 私は八日目の割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きつすいのヘブル人で、律法についてはパリサイ人、⁶ その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されることのない者です。(要するにパウロは「私はユダヤ教社会のエリートである。」と言っているわけです。最高学歴を持っていました。最高の肩書き、地位、名誉を持っていました。サンヘドリンという議員の1人。今で言うところの

裁判官、検察官、弁護士、法律家、大学教授を兼ねたような役職に就いていました。70 人しかいないそのエリートの中の 1 人であったわけです。ベニヤミン族というこれもエリートの部族であります。ユダヤ人の中のユダヤ人であると。「人間的なものに頼むところがあるとするならば、私はまさに最高の人物であろう。」と言っているわけです。でもその後を見て下さい。)「しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、**損**と思うようになりました。』この“**損**”という言葉は、「肥し」と同じような言葉です。糞とかクソと、ちょっと汚い言葉申し訳ありませんが、そういう言葉であります。何が言いたいかといいますと、あなたももしかしたらパウロのように人間的なところに頼むところがあるかもしれません。人間的なものに頼むところ。いろんな肩書き、いろんな学歴、そして「私はかつて教会で役員をしていました。私はかつて教会で聖歌隊のリーダーでした、ワーシップリーダーでした。私はかつて牧師でした、牧師夫人でした。」頼むところがいっぱいあるかもしれません。でもそれは過去の栄光であって、それらは何の役にも立ちません。それはむしろパウロにとっては損だと言われています。あなたが過去にどれだけのことをなしたからといって、どれだけの人物と評価されていたからといっても、過去は過去です。今あなたがどうなのかということが問われています。イエス・キリストはそのような葉っぱには目もくれません。過去の栄光をいくら自慢したって、それをアピールしたって、それは損です。それはただの糞です、クソです。そうではなくて、イエス・キリストはまさにあなたの根深いその罪を掘り下げて掘り下げて暴いて下さいます。あぶりだして下さい。そして葉っぱで身を固めた、立派に見せかけた偽善者のあなたを、実がないあなたを、実のある者に、本物に造り変えようとされます。過去の栄光、自分自身、自分の栄光、そうしたものをすべてイエス・キリストは取り払って追い出して下さいます。そして罪をすべてあぶりだして下さい。そうすることによってあなたが実り豊かな者になるからです。是非今日から、もしあなたがこれまで全く実をならせなかった、葉っぱばかり生い茂らせる偽善者であったならば、今日からぶどう園の番人であるイエス・キリストに身を任せて、そしてイエスのためだけにまずは生きるという決心をして欲しいと思います。まず私たちはイエスのために実を結ぶ者でなければいけません。そうでなければ決して充実した人生を送ることは出来ません。決して人を幸せにすることは出来ないんです。見た目は今は充実しているかもしれません。今は見た目はそれなりの人物として周りからは評価されているかもしれません。でもあなたの将来は残念ながら暗いです。枯れに枯れきっていきます。それは分かっています。この中には、そこを通過して来た人も大勢いると思います。ある程度年齢を経て、信仰歴を経て、「私は長い間葉っぱばかりの人生を送ってきた。葉っぱばかりの信仰生活を、教会生活を送ってきた。そして本当に惨めだった。こんな枯れた経験は二度としたくない。でもイエスに出会って再び実を結ぶ者に変えられた。」そういう経験をしている人たちもこの中には大勢おられます。彼らに聞いてみて下さい。今あなたは若いから分からないかもしれません。そんなことを信じられないと思うかもしれません。イエスに対して実を結ばなければ、あなたはいつか必ず行き詰まります。そして最後に自分が枯れに枯れきることを目の当たりにします。それはショックだと思います。イエスが戻って来られる日、あなたには差し出す実があるでしょうか。イエスのために、イエスの喜びのために、イエスの満たしのために、イエスを祝福するために、今日の礼拝は捧げられたでしょうか。日々の生活は誰のために。あなたのためですか、あなたをよく見せるためですか。たくさんやたらめったら葉を生い茂らせているばかりでは、いつかあなたは本当に辛い目に遭います、痛い目に遭います。イエスはそのことを望んでおられませんから、是非とりなして下さるこのお方に身を任せて欲しいと思います。では今日はこれで終わりたいと思います。